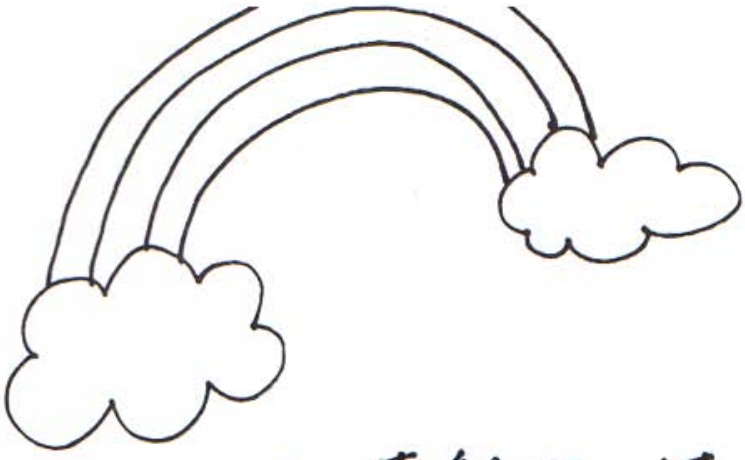
とたよち

美肌通信
6月号
vol.71

サナ



6月号 表紙

今月号の表紙は、はっぱの上に
元気なカタツムリと、となりに
かわいらしいカタツムリ!!
仲良くウサギさんとちょうちょも
楽しそうにあそんでます♡

ピアノが趣味で、お友達と
あそぶことが好きな女の子が
かいてくださいました!
逆上がりも得意な元気な女の子
です(^ω^)♪

院長はじめ
スタッフ一同じより
感謝いたします

記憶する限り今まで5～6回程、「また職員がかわったね」と御指摘頂いたことがあります。
最近も経験したことから、今回はその所感を述べます。その前に私は経営者であることから企業やサービス業・大手～個人の外食産業など至る所で目にする職員募集の広告に対し常に敏感に反応します。昨今ありとあらゆる職種で常に募っていますが、そこでも週単位で働く人に変化がみられます。

話を戻します。私は職員に日常的にこう申しています。看護師・看護助手・カウンセラー・事務員、それぞれに自己責任を負って頂きます。しかし最終的な監督責任は私が負います。だからこそ、私の意向に従って頂きますと。例えば、職員がボーッと突っ立っていて医者だけが走り回っているクリニックが世間にはあります。職員は午前中2回午後2回欠伸をしていれば18時になる、そんなクリニックも珍しくないでしょう。しかし当クリニックではざっと午前中60人 午後70～80人又はそれ以上の患者様を診ます。（以前は受付時間を今よりも長くとっていたため患者数が更に多かったが、将来にわたってこれを続けていくのは困難と判断し受付時間を短縮した経緯がある）

これら全ての患者様を診るためには、各職員に職種の枠を越えない又は各個人のポテンシャルを越えないギリギリの責任を負わせ、常に考えさせ、次は何をする、次は何が必要、何をしなければならないかを考えて行動させる必要があります。ですから私は職員に「死んでからじゃ頭使えないんだから、生きてるうちに頭使おうよ」と言っています。

皮膚科の特質も大いに一人当たりの診察時間に影響を及ぼします。例えば患者様の主訴が手にあったとします。手を診た所、体幹や上下肢の診察が必要になることが皮膚科の特性上あるのです。すると下着だけになって頂く必要が出てきます。診察終了後は着替えに時間がとられます。しかし耳鼻科や眼科ではどうでしょう。下着だけになって全身を診られた人が皆様の中に何人いるでしょう。おそらく皆無ではないでしょうか。又別の方では顔が主訴であるにも拘らず（仕事で化粧をしない訳にはいかないことも理解の内ですが）顔の詳細な所見が化粧のため十分に診てとれない場合も時に経験致します。その際は化粧を落して頂くかも知れません。いずれにしても時間がかかるのです。

一人を5分で診ると1時間で12人、3時間では36人です。60人には程遠い。一人の医師が診る以上60人を診るためには約3分弱のペースを維持しなければなりません。当院では、問診（病歴の聴取）は先ず職員が行います。これも時間短縮のためです。しかしこれを疎かにすることは出来ません。なぜなら最重要な一つであるからです。問診は聴取する個人の力量以上のものになることは絶対にありません。従って当クリニックでは必要十分な病歴を聴き出せる様になるために全職員で勉強会を行います。また別の局面では職員の力量を計りながら各種院外での研修を課しレポートの提出及び発表も行います。この様なことを行うため時に脱落者が出ます。その脱落者が自ら退職者となるのです。私はクリニックは民間企業と同じと考えています。出張もあれば研修もある。会議もあれば新しいアイディアも必要です。全くもって普通の会社組織と同様です。しかしクリニックや診療所で長い間働いていると専門職であればある程ぬるま湯にどっぷりとつかって井の中の蛙になっていることも少なくない様に思えます。

私は変化(発展)していくことを望みます。それには努力が必要不可欠です。そしてそれは当然私自身に課せられた課題であると同時に、職員全員にもその良き理解者になってもらう必要性があると考えています。そこに窮屈さやそぐわない人が現れ、時に3日・30日・3ヶ月で辞めていきます。面接をして見学をさせて再度面接を行い本人が「やる」と言ったにも拘らずに。そしてこう口にします。「思っていたものと違っていた」と。つまり「環境」が意にそぐわないというのです。しかし、その人達に合う環境とは一体何でしょうか。ジェームスアレンという作家がこう言っています。「環境が人を作るのではない。環境は私達に私達がどんな人間であるかを教えてくれるだけだ」と。

「ダーウィンの進化論」が正しいか否かはこの際別問題とさせて頂きますが、H13.9.27の所信表明演説において時の小泉首相が引用した「この世に生き残る生き物は最も力の強いものか。そうではない。最も頭の良いものか。そうでもない。それは変化に対応できる生き物だ」と言ったそうですが、私からすれば今の日本列島が政治的にも環境的にも常に変化していることから、個人も組織(企業)もまた「環境の変化」

に対応出来なければいけないと感じています。
従って私は辛抱強く努力し素直で創意工夫をする職員を可愛いがります。そして現在該当する職員が出てきていることを喜びに感じると共に大いに期待している次第です。

患者様から慕われ、他の医師が避けるハイリスクな仕事を受け入れる立派な医師がいます。その医師は人並み外れた手術の技術を持ちながら、甘んずることなく煩悶するのです。本当に真似の出来ない徳の高い医師です。今の若者はとかく自己評価が高い。更にプライドもやたらと高い。
論語の中に「子曰わく、苗にして秀でざる者あるかな。秀でて実らざる者あるかな」という一説があります。苗を植えたけど花を咲かせないものがある。花は咲いたけど実を結ばないものがあるということ。では、実を結ぶ人と結ばない人との違いはどこにあるのか。
「之を如何せん、之を如何せんと曰わざる者は、吾之を如何ともするなきなり」。自分という人間はまだまだである。どうやったら更に上達するのであろうかと問い続けて努力する者でなければ実を結ぶことはないという解釈になる。現在で言えば素質はあったのに、そこそこ使いものにはなるが、努力したいので、大成はしたいと

いった所だろうか。しかしそこに落とし穴がある。
「日々新」の精神を忘れると現状に留まることはなく衰退することになる。私にとっても肝に銘ずる言葉である。

なんという花かは分からないが砂漠にも花は咲くという。砂漠であるため当然空気も乾ききっている。灼熱の日差しが降り注ぐ。植物の生育にこれ以上の悪条件はないだろう。しかし花は実際に咲く。だが、その花は思ったかも知れない。もっと良い環境で肥沃な土壌に根を下ろし、水分をたっぷり吸収して育ちたかったと。いや、そうではない。そもそも、そんなことを思っている花ならとうに枯れているだろう。それどころか、笑ってこう教えてくれるかも知れない。環境が良かろうが悪かろうが、与えられた条件を最大限に生かしただけだ。懸命に茎を伸ばし精一杯に花を咲かせているんだよと。与えられた環境の中でひたすら生きるものは美しいと私は思う。

最後に。私が小学生の頃には、必ずあった二宮尊徳(金次郎)の像。先達の金言を紹介します。尊徳は情に厚く高徳の人であったことは周知の事実です。しかし、彼をもってしても言わしめた言葉がある。
「太陽の徳、広大なりといえども芽を出さんとする念慮、育たんとする気力なきものは仕方なし」

院長 拝